

あなたならどうする？

教育管理系理学療法研究部会

こんなとき



福岡県理学療法士会専門領域研究推進部

教育・管理系理学療法研究部会委員

永尾 泰司 田中 正則 安田 光進
石橋 敏郎 木村 淳志

教育管理系理学療法研究部会では、学生教育や管理業務全般を研究の対象にしています。

研究テーマは、皆さんが日常体験している身近な問題ばかりです。

管理業務や学生教育などで、困難に遭遇したり、疑問を感じたりすることはありませんか？

当研究部会はそのような困難、そんな疑問をテーマにとりあげます。

研究成果は理学療法福岡や広報などで発信しています。

上のロゴマークを見かけたら、当研究部会からのメッセージです。ぜひ覚えておいて下さい。

【教育・管理系理学療法研究部会 平成18年度事業計画】

1, 趣旨

県士会会員の学生教育・管理業務に関する問題点を明らかにし、これらの問題に対し、どう対処すべきか、何が必要か、などを多くの会員の意見を取入れつつ模索、研究していく。

研究結果は、事業を通じて広く会員・社会に提供し、時代の流れに則した最新の見解を取入れ、常にその見直し、修正を図るものとする。

2, 研究課題

- 1) 学生教育・管理業務が抱える具体的問題点を正確に把握するために、必要な指標、データ収集の方法、解析方法などを検討し、研究方法を確立する。
- 2) 問題点を整理し、着手すべき問題を決定し、優先性を考慮しながらどのように事業展開するか検討する。
- 3) マニュアル(仮称:あなたならどうするこんなとき学生教育編、職場編)作成のための資料作り(数年間)
- 4) 今年度も臨床実習における成績評価表の形態を引き続き主要研究課題とする。

3, 事業内容

- 1) 第一回研究集会(安全管理について)
- 2) 第二回研究集会(臨床実習成績評価表について)
- 3) アンケート調査:臨床実習における成績評価表について(No.2)
- 4) 研究部会の開催(7回程度)

4, 研修会開催日時

平成18年12月予定 10時00分~12時30分

- 5, 研修会開催場所
国立病院機構福岡東医療センター附属リハビリテーション学院
- 6, 研究機関
教育・管理系理学療法研究部会
- 7, 責任者
専門学校柳川リハビリテーション学院 永尾泰司
- 8, 企画書作成者
専門学校柳川リハビリテーション学院 永尾泰司
- 9, 研修会開催形式
講義形式・パネルディスカッション形式・座談会形式等

<平成18年度の活動内容および予定>

・活動内容

臨床実習成績評価表の試案作り
研究集会開催準備
アンケート調査準備

・研究集会開催予定

テーマ:臨床実習成績評価表の統一について(仮称)
日時:平成18年12月(詳細は未定)
場所:国立病院機構福岡東医療センター附属リハビリテーション学院

<活動状況>

月に1回程度、部会を開催します。
年に1,2回研究集会を開催いたします。
学会・理学療法福岡・広報などで研究成果を発表
します。

理学療法業務の問題点
～ 残業は本当に必要か?～
臨床実習における問題点
～ 学生からみた臨床実習指導者像～
臨床実習における合否基準を考える
～ アンケート調査より～

<今日までに取り組んだ研究テーマ>

理学療法業務及び学生教育における
問題点について
～ アンケート調査より～

個人情報保護法対策
～ 理学療法業務とその周辺より～
臨床実習成績評価表の統一に関する意識調査

問い合わせ窓口:専門学校柳川リハビリテーション学院

理学療法学科 永尾 泰司

TEL 0944-72-1001

FAX 0944-72-1018

【現在までの研究活動および結果の要旨】

理学療法業務及び学生教育における問題点について

～アンケート調査を実施して～

<理学療法福岡 No.15 2002 41-44>

教育管理系理学療法研究部会では、県士会員の学生教育・管理業務に関する問題点を明らかにし、これらの問題に対し、どう対処すべきか、何が必要か、などを多くの会員の意見を取入れつつ模索、研究していくことを事業目的の1つに挙げている。そこで当研究部会は、平成12年度にアンケート調査を実施し、問題点を分析し、粗大なレベルにおいてその傾向性を把握することができた。

その結果、職場の問題においては、リハ科外での問題として、他部門との連携(52%)や管理・運営(34%)に困難を感じるという意見が多く、またリハ科内では、煩雑な業務(33%)や管理・運営(17%)、人員不足(16%)などの問題が上位を占めていることが判った。

学生教育に関する問題としては、指導時間の不足(46%)や指導力不足(28%)が指導者側の問題の内訳として上位を占めており、学生側の問題では、資質面(42%)や態度、姿勢(37%)といったいわゆる情意領域に関する問題が大部分を占めていることが判った。

理学療法業務の問題点

<第12回福岡県理学療法士学会 2003年2月>

～残業は本当に必要か?～

<理学療法福岡 No.16 2003 21-16>

当研究部会では、今回「手間を取り時間のかかる業務」に着目し、アンケートにより県士会員の実態調査を行い、その問題点と解決への糸口を把握することが出来た。

問題点として、30分以上の残業(89%)、業務や残業の短縮の必要性を感じる(96%)、職員不在時のフォロー体制に問題あり(80%)、休暇の円滑な取得が困難(77%)などがあり、業務効率化の必要性は認識されているが、その推進がなされていないということが判った。

われわれは残業原因1位のカルテ記載業務に着目し、残業なし施設群では、一患者の診療直後毎又は、診療の合間にカルテを書いている施設が多いことを確認できた。すなわち、診療業務を行うその場所(リハ室等)でのカルテ記載が可能となるよう、カルテ保管場所を考慮することが解決への糸口であると考えられる。

最重要課題はカルテをどう処理するかであり、業務効率化対策が組織ぐるみで発動できるかが重要ポイントになるであろう。

臨床実習における問題点

～学生からみた臨床実習指導者像～

<理学療法福岡 No.17 2004 45-50>

臨床実習における問題点を再検討するため、平成14年度新人研修会参加者に対して、臨床実習当時の学生時代を想起していただき、アンケート調査を実施した。結果は、回答者の半数以上が指導者について“おかしい”と不信を感じた体験をもっており、この傾向が女性回答者でより大きく、特に指導内容に対するものが上位を占めていることが判った。この他に尊敬できる指導者像に関しては、知識・技術や指導内容、患者との関係などが上位を占めていた。更にこれらの具体例に関しても回答を得ることができた。学生との信頼関係を維持することの重要性を再確認し、今後の臨床実習教育のあり方を考えていきたい。

臨床実習における合否基準を考える

<第14回福岡県理学療法士学会 2003年2月>

～アンケート調査より～

<理学療法福岡 No.18 2005 33-37>

臨床実習における学生の合否は、様々な価値観によって決定されているのが現状である。今回、臨床実習指導者の経験を有する福岡県士会員に対し、どのような根拠や状況をもとに合否を決定しているかアンケート調査を行った。その結果、提示した学生像の採点結果や合否の理由などに関し、回答を得ることができた。分析結果では、合格採点者は、情意領域(適正や態度の領域)が特定のレベルに達していれば、その他の行動目標の到達度に関しては寛大にとらえており、逆に不合格採点者では情意領域を重要視しているものの、具体的な行動目標の到達度をより厳格に評価する傾向にあることが判った。また、経験年数がより長い指導者ほど不合格とする傾向がみられた。施設形態別の回答では、病院所属の回答者で合格とする比率が最も高く、教育機関所属の回答者で最も低かった。今後、臨床実習学生の評価において、可能な限り同一の価値観で評定できるよう標準化の道を模索していくことが望まれる。

個人情報保護法対策 ～理学療法業務とその周辺より～ <広報平成 17 年 11 月号、平成 18 年 1 月号>

講師：国際医療福祉大学グループ高木病院医事管理部長

MD 内藤 恵子 先生

今回の研究集会では、われわれ理学療法士にとって避けては通れない問題である個人情報保護法対策をテーマに取り上げました。

研修会前半においては、個人情報保護法の内容、成立の経緯、またその実際について解説をいただき、医療機関での対応策について学ぶことができました。後半は、会員より事前に集められた質問事項を題材に、アドバイスをいただきながら対策のあり方を参加者全員で考えることが出来たと思います。

臨床実習成績評価表の統一に関する意識調査

<理学療法福岡 No.19 2006 掲載予定>

理学療法士の養成校が急増する中で、複数の養成校より学生を受け入れて臨床実習成績表に記入しているにもかかわらず、成績表の内容は養成校によって異なっているのが現状である。今回、福岡県理学療法士会員に対し、臨床実習成績表の統一に関する意識調査を実施した。その結果、約半数が統一に賛成していることが分かった。また、成績表の記入年数が長い人ほど、統一しない方がよいという意見が増え、成績表の内容を改善することを希望していた。さらに、成績表の改善内容と理想案としては、評価用紙の項目と内容、合格の基準、評価方式などが提案され、成績表の中で重要視している項目は、記入年数にかかわらず主に情意領域に該当する項目を選択する者が多いことが分かった。今後、本結果を受けて、臨床実習成績表を統一する方向に向けて、その内容をより吟味して、可能な限り同一の価値観で評定できるよう標準化の道を進めていくことが望ましい。